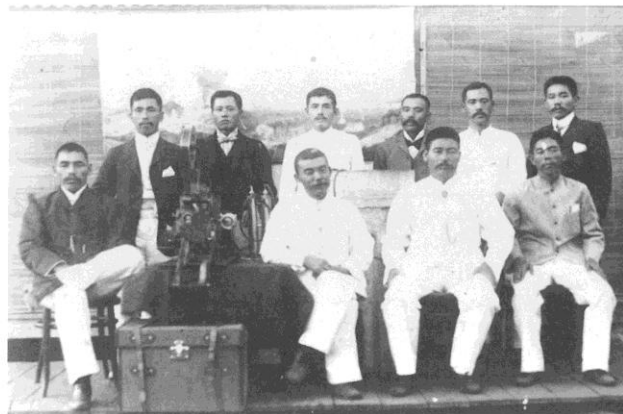


ブルームの真珠貝採取と愛媛県人

清水 正



ブルームにおける映写会（明治40年前後）日露戦争の記録映画ではないと思われる。
前列右端・三瀬豊三郎、前列右より2人目・山本亀太郎、後列右より3人目・山崎栄次郎

真珠貝採取というと、多くの人は真珠採りとまちがえてしまうようだ。実は婦人の洋服の高級ボタンの一つとして真珠貝の加工品が愛用されていたのだ。

オーストラリアでは木曜島とブルームが真珠貝の二大産地であり、世界的にも有名であった。ブルームを中心とした採貝地域は一八七〇年代に発見された。日本人はその当初から労働者として働いていたようである。

潜水夫は日本人がほとんどであった。日本人の潜水能力は東南アジアの他の民族よりも優れており、また勤勉であると評価されたからだ。採貝船所有の白人たちは、真珠貝の需要が増すにつれて、日本人労働者を多く受け入れる必要を感じ、濠州政府へ日本人の居住

許可を願い出た。その結果、明治三十年以前に來航した者に居住許可が与えられることになった。西宇和郡三瓶出身の三瀬豊三郎、山本亀太郎、八幡浜川名津出身の山崎栄次郎はブルームに日本人向けの食料雑貨店と下宿屋を開いた。

彼らの成功を聞き、また彼らの渡航の案内を受けて西宇和郡や南宇和郡の青年がブルームに向かった。多い時には三瓶周辺から三十名ほどがブルームにでかけた。

木曜島で働くほとんどの人が和歌山県出身であったが、ブルームでは和歌山県人は三分の一程度であり、愛媛県人は和歌山県人に次いで多かった。

なぜ遠いオーストラリアに多くの者がでかけたかというところ、それはダイバーになると年収が千二百

円の高収入になったからだ。大正時代半ばに三瓶町にできた山下第二女学校校長の年俸が千二百円であったことを考えると、その価値がわかるであろう。

三瓶の入り江で潜水服を着て練習をしてブルームに向かったという話が残っている。

最盛期の明治四十年ころ、ブルームには日本人が二千人ほどいた。日本人経営の写真屋が三軒もできるほどであった。そういった中で、採貝業がますます発展してラッガーと称した白人所有の採貝船（十五トンから二十トン）が多い時には二百隻に至った。

真珠貝採取の仕事は楽なものではなく、危険な仕事であった。沿岸部の真珠貝が取り尽くされると、だんだん沖合の海底を潜ることになった。三・四十隻の採貝船が狭い水域に集まっていた作業である。潜水夫が三・四十メートルの深さまで潜るため、エアパイプがもつれたり、切れたりする事故がしばしば起きた。また鯨が近寄ってきて、命綱やエアパイプを引っかけたこともあった。二か月ほどの一作業期間に平均十四・五名が

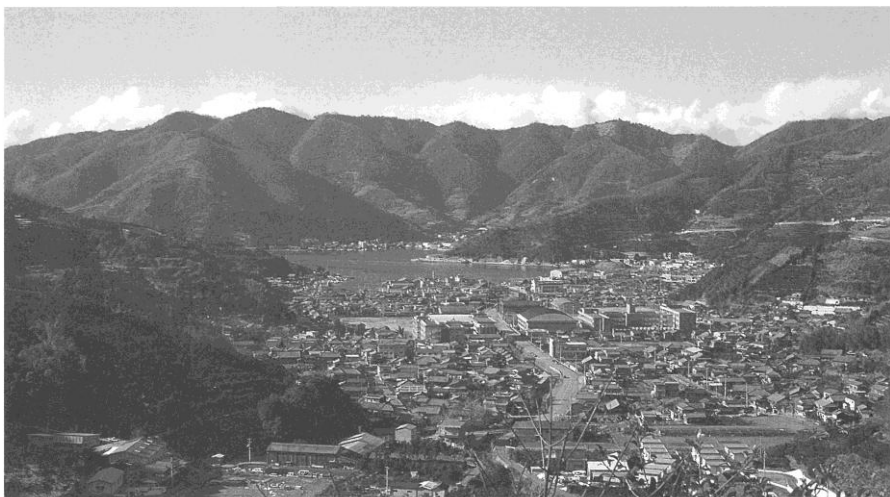
死亡した。死亡事故に至らなくても、水圧がかかる海底作業のため、潜水夫の多くが難聴になった。また潜水服内の空気が少ないと、目が飛び出した。潜水服を脱がしてゆつくりと眼球を眼窩に押し込んでやると、ある程度回復はするものの、出目金になった。

船上にいる命綱を持つ係り（テンドー）も常にロープを握っているため、手の指が曲がらなくなったりした。

日本人の居住許可と平行してブルームでは日本人会が組織され、三瀬豊三郎や山本亀太郎、山崎栄次郎はその役員に選ばれた。

山本亀太郎が「西濠日本人同盟会」の会頭であった時、白瀬中尉の南極探検の事業があった。彼の残した日本の新聞の切り抜き帳には白瀬の南極探検の記事がいくつかが貼付けられている。明治四十五年四月十二日、白瀬中尉がオーストラリアのブルームに向け、シドニーから発した寄付金要請の電文もその中に残っている。電報の中の「先年來の御厚情」「再度の御送金をこふ」という言葉によって、ブルームの日本人たちが南極





三瀬豊三郎や山本亀太郎の出身地・三瓶町風景

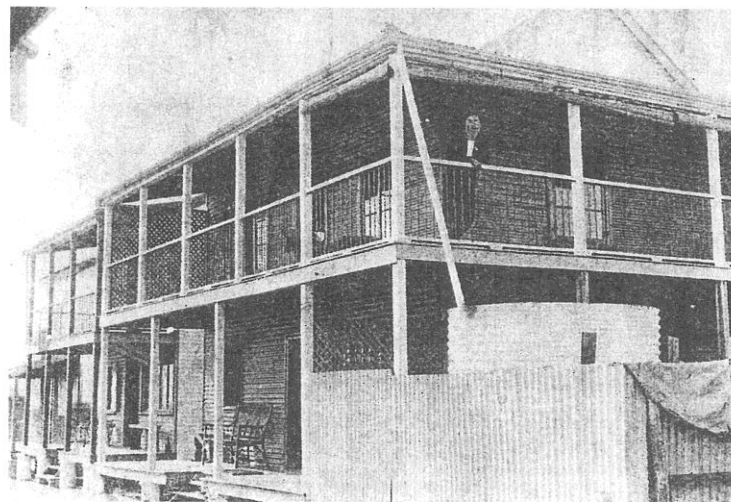


西宇和郡三瓶町安土にあるブルームでの死亡者の墓。「ブルーム」の文字が刻まれている。

人々の学力や教養の高さがうかがえる。
現在ブルームに残る日本人墓地には七百基の墓石があり、それらに九百名ほどの日本人名が刻まれている。十五年ほど前に故笹川良一が尽力して墓地整備が完了した。今ではブルームの観光地の一つになっている。
一方西宇和郡三瓶町の町並みを歩くと、庭の池のそばに、大きな真珠貝が置いてあるのを目にすることがある。夜、猫が池の魚を取りにくるので、これを置いておくという。その真珠貝こそ、何代か前の人がブルームからみやげに持

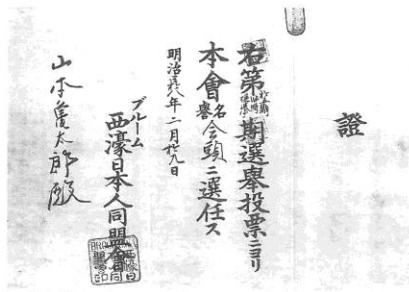
しめず、ただし、昭和二十三年大洲市に生まれる。愛媛県内のキリスト教の布教の歴史に関心をもち、論文をまとめる。また、大正・昭和前期の愛媛県の俳句の歴史に関心をもち、特に俳句雑誌「葉校」創刊者の玉木北浪の功績に着目。さらに戦前の南洋における俳句を季語の問題と絡めて論文としている。松山市在住。

って帰った物である。しかし今ではブルームでの体験を語る人はほとんどいなくなりました。



三瀬豊三郎経営の下宿屋。右下の白いものは貯水タンクである。

しては青年歌舞伎が行われた。山崎栄次郎がかつらや衣装を日本から取り寄せ、三味線などもそろえて本格的なものを演じさせた。これは山崎自身が芝居好きで、郷里でも当時はやりの「不如帰（ほととぎす）」などの演劇を自ら演じ



山本亀太郎のブルーム西瀬日本人同盟会会頭の証書

探検隊に大きな関心を寄せ、山本亀太郎が中心になって資金援助をしたことがわかる。
ところでブルームに住んだ日本人の娯楽として何があったであろうか。花札・将棋・相撲などがあるちろん行われた。変わったものと

ていたことによる。また当時まだ珍しい映写会を行っている。その他の娯楽としてはテニスコートや競馬場が近くにあり、日本人も加わり楽しんでいた。
山本亀太郎はブルームから持ち帰った仕入れ帳（明治四十年代）を三冊残している。それは英国製で背表紙が皮で装丁された厚さ十センチのものである。これを調べてみると、ブルームの日本人が日本食をとっていたことがわかる。福神漬・高野豆腐・露水煮・筍水煮・鮑水煮・正喜撰（茶）・そうめん・醤油・みそ・宮島杓子などの品名がその仕入れ帳に記されている。

また薬では「仁丹」などを始め傷薬・胃薬が見られる。「ライオン歯粉」などの品名も見られる。これらはすべて日本から輸入した物である。

さらに仕入れ帳を見ていくと、講談本百冊とか小説では徳富蘆花の「不如帰」「思出の記」、その他「浄瑠璃百段集」「サワリ歌本」「六ヶ月英語」五冊、「新釈英語」四冊、「新式日英辞書」などの記載もある。ブルームに在住した